唯物史観（史的唯物論）を考える

田中　史郎

はじめに

いわゆる「唯物史観（史的唯物論）」と呼ばれる論理は以下に示す短い文言をさす。この文章は、マルクス『経済学批判』（1859 年、41 歳）[1]の「序言 Vorwort」にある。

マルクスは、当初、哲学を学ぶが、それに満足せずに法学そして経済学の研究に領域を移していった。この「唯物史観（史的唯物論）」は、マルクスが本格的に経済学研究に打ち込む第一歩を宣言した文書と言える。それゆえ、完成した経済理論（『資本論』のような）を前提とするものではなく、文字通り「導きの糸」として経済学や社会科学の全体像を確認するものであると言えよう。

１.「唯物史観」の公式

まず、「唯物史観」の公式とされる全体を掲載しておこう。

【前文】[2]わたくしを悩ませた疑問を解決するために企てた最初の仕事はヘーゲルの法哲学の批判的検討であって、この仕事の序説は 1844 年にパリで発行された『独仏年誌』に掲載された。わたくしの研究が到達した結論は次のことだった。すなわち、法的諸関係および国家諸形態は、それ自身で理解されるものでもなければ、またいわゆる人間精神の一般的発展から理解されるものではなく、むしろ物質的な生活諸関係、その諸関係の総体をヘーゲルは 18 世紀のイギリス人やフランス人の先例にならって「ブルジョア社会」という名のもとに総括しているが、かかる諸関係に根ざしているということ、しかもブルジョア社会の解剖は、これを経済学にもとめなければならないということである。＜中略＞　わたくしにとって明らかとなり、そしてひとたびこれを得てからは、わたくしの研究にとって**導きの糸**として役立った一般的結論は、簡単に次のように公式化することができる。

【第１テーゼ。社会の最終審級】人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係をとり結ぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形成しており、これが現実の土台となって、その上に、法律的、政治的上部構想がそびえたち、また、一定の社会的意識諸形態もこの現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は社会的、政治的、精神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するのである。

【第２テーゼ。歴史の発展動力】社会の物質的生産諸力は、その発展がある段階に達すると、いままでそれがそのなかで動いてきた既存の生産諸関係、あるいはその法的表現すぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態から桎梏へと一変する。このとき社会革命の時期が始まるのである。経済的基礎の変化につれて、巨大な上部構想全体が、徐々にせよ急激にせよ、変革される。このような諸変革を考察するさいには、経済的な生産諸条件における物質的な、自然科学的な正確さで確認できる変革と、人間がこの衝突を意識し、それと決戦する場となる法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、つづめていえばイデオロギーの諸形態とをつねに区別しなければならない。ある個人を判断するのに、かれが自分自身をどう考えているかということには頼れないのと同様に、このような変革の時期をその時代の意識から判断することはできないのであって、むしろ、この意識を物質的生活の諸矛盾、社会的生産諸力と社会的生産諸関係とのあいだに現存する

[1] 翻訳では、杉本俊朗訳『経済学批判』国民文庫（大月書店）、武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳『経済学批判』岩波国民文庫、が知られている。

[2] 【前文】等は引用者。

衝突から説明しなければならないのである。一つの社会構成は、すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発展しないうちは崩壊することは決してなく、また新しい高度な生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化しおわるまでは、古いものにとって変わることは決してない。だから、人間が立ちむかうのはいつも自分が解決できる課題だけである。というのは、もしさらに詳しく考察するならば、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに現存しているか、または少なくともそれが出来はじめている場合にかぎって発生するものだ、ということがつねに分かるであろうから。

【第 3 テーゼ。歴史の時代的区分】大まかにいって、経済的社会構成の進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式をあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の敵対的な、といっても個人的な意味での敵対ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味での敵対的な、**形態の最後のもの**である。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがって、この社会構成をもって、人間社会の**前史**は終わりを告げるのである。

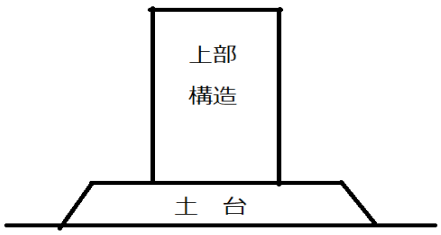
マルクス『経済学批判』（「序言」、1859 年）より

2．「唯物史観」公式の吟味

以上は、3 つのテーゼから構成されており、以下のように解釈できる。

第 1 テーゼ。社会の最終審級。

いうまでもなく、社会は様々な要素が複合して構成されているが、それをもっとも根源的に規定しているものは何か、という問いを発したとしよう。おそらく、法学者は「法律である」と言い、宗教者は「神だ」と答えるだろう[3]。

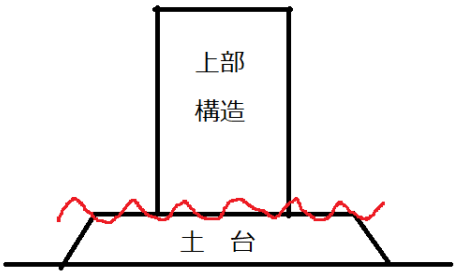


そうした中で、マルクスは、いわば社会の最終審級として、「土台／上部構造関係論」を示すとともに、土台が上部構造を規定すると考えた（「土台の上部構造規定説」）。マルクスが哲学や法学から経済学に研究の方向を定めた論理がこの第 1 テーゼである。

じつはマルクス以降も、こうした思考には反対する論者も多々存在する。例えば、**ヴェーバー**（Max Weber）は「キリスト教（プロテスタント）」に、**レヴィ＝ストロース**（Claude Lévi-Strauss）は「構造」に、**和辻哲郎**は「風土」に、それを求めた。しかしそれは部分的には妥当するが、世界史を描くことには至っていない。

第 2 テーゼ。歴史の発展動力。

先の「土台の上部構造規定説」を前提として、マルクスは、歴史の発展動力を説明する。歴史の展開や発展は、土台と上部構造の軋轢から生じ、上部構造は土台の変化につれて変革されるという。歴史的な大きな変革、革命はこのように生じるというわけであろう。



じつは、こうした視角と対極である英雄史観[4]は形を変えて今日までも続いている。例えば、司馬遼太郎もその一人と言えよう。

英雄史観は小説などでは興味深いものの、それは歴史の展開をいわば「後付け」で説明したにすぎないのではないか。

---

[3] 政治学者、心理学者、自然科学者なども同様な回答をすると思われる。

[4] 英雄史観とは、歴史上の著名人が社会を嚮導（きょうどう）して来たのであって、歴史はそうした英雄の思想や行動に規定されるとする考え方をさす。

第３テーゼ。歴史の時代的区分。

マルクスはここで、先の第一・第二のテーゼを踏まえ、近代という時代の歴史的な位置づけを与えている。アジア的[5]、古代的、封建的な時代を前提とした近代ブルジョア社会（資本主義社会）は、社会的な敵対の最後の形態であること、したがって、近代ブルジョア社会（資本主義社会）をもって、人間社会の前史は終わるということ、これが結論である。ここで、「アジア的 、古代的、封建的」を「古代・中世」とし、「近代ブルジョア社会」を「近代（資本主義）」と簡略化して図式化すれば、以下のようになろう。

世界史の発展史

	古代・中世	近代（資本主義）	未来
形式（社会制度）	**不平等（身分制）**	**自由・平等**	**自由・平等**
実態（経済的富）	**不平等（貧富の差）**	**不平等（貧富の差）**	**自由・平等**
	前史		**本史**

すなわち、資本主義社会は、身分制を打破し形式的な平等を実現してことに意義があるが[6]、経済的には何ら平等性は実現していない[7]。その意味で、敵対的関係の最後の形態といえる。したがって、これを超える視点は、形式的な平等を担保しつつ、実態的（経済的）な平等を実現することにあるという結論が導かれる。

形式的な観点からすれば、古代・中世と近代（資本主義）の間に大きな違いがあるが、実態的な観点からすれば、古代・中世と近代（資本主義）は同類であって、それらと未来社会との間に大きな違いがあるといえる。近代（資本主義）までを「前史」と一括し、それに対して未来を明示的ではないものの「本史」と規定する意味は、このように理解できるのではないか。

まとめ

「唯物史観」の公式を巡っては、これまでも幾多の解説や論争がなされてきた。ここで示した「第1.2テーゼ」の解釈は通説に近いが、「第３テーゼ」にかんする解釈はオリジナルである。ご意見を伺いたい。

また、宇野弘蔵は、以上のような「唯物史観」の公式を「仮説」だと考えた。というのは、３つのテーゼともそれ自体で論理的に証明することができないからだ。というより、より正確にいえば、唯物史観の公式は、論理的な構造になってはいないということの指摘である。その意味で、仮説だと。そこで、宇野は、この唯物史観の公式の論証を自らの「原理論」に求めた。この公式の３つのテーゼは、いずれも、「原理論」において縮図的に明らかにすることが出来るというものだ。これを「方法的縮図論」[8]という。この提起も含め、さらに検討が必要であろう。

---

[5] ここでの「アジア的」ということが大論争になった。古代的や封建的というのは、歴史概念だが、アジア的というのは地理的な概念であり平仄（ひょうそく）が合わない、というわけだ。マルクスにとっては、当時のアジア（例えば、インド）などは、古代とされるローマ時代よりも古い社会に見えたのであろう。ここでの「アジア的」とは、古代ギリシャ・ローマ時代以前のものと考えられている（これは、私説である）。

[6] 法の下での平等原理や普通選挙制度などを想定すればよい。

[7] 資本主義のもとにあっては、形式的な平等が実現されているため、実態的な不平等は目につきにくく、またそれが明確になっても非難されることはない。

[8] 宇野弘蔵（1969）『資本論の経済学』岩波新書、92頁。